

18	豊田	童子山小学校	スドウ リョウ	
			氏名	須藤 涼
分科会番号		20	分科会名	総合学習

研究題目

多面的・多角的な見方・考え方を働かせて、問題解決に参画する子
 ― 6年 地域教材を活用した個別追究学習を通して ―

研究要項

1 研究のねらい

(1) はじめに

本学校区には、文化ゾーンとして歴史・文化芸術と緑の調和をテーマに整備された地区もあれば、かつて城下町として建物の建造に制限をかけていたほど、町の保存に努めている地区もある。文化ゾーン内には、豊田市博物館をはじめ豊田市美術館、豊田市民文化会館などがあり、学校区には数多くの教育的リソースが存在している。また、町の保存に努めている地区は城下町を色濃く残している。この地区は、町並みだけでなく挙母祭りも大切にしており、子どもからお年寄りまで熱心に祭りに参加している。数多くの魅力がつまった学校区である一方で、「交通渋滞」「道の狭さ」など学校区が抱える問題が存在するのも事実である。そこで、学校区に合わせた学習を展開し、それぞれの地域の特色を学習に組み込むことで、自身が住む学校区への地域愛や問題解決能力を育められると考えた。

本校では、令和5年度から「個と協働の追究に打ち込み、学びつづける子の育成」を目指して研究を進めている。研究を進める中で、子どもたちが追究に没頭するためには、「単元の本質を洞察する深い教材（これ以降は「材」と表記）」と「学びを協働化する多様な場の設定」が必要だと分かってきた。そのため、本研究では、子どもたちにとって身近な地域に「材」を見出し、学校区の問題に対して自分で資料やデータなどを収集しながら根拠を見付ける「追究」活動を軸に据える。そして、問題解決のために、個々が追究したものをもち寄って学級内で対話し、新たな問題をつくり、次の追究活動に向かうことを繰り返す。

地域に材を求め、個別追究と協働追究の繰り返しを通して、問題解決までの道筋を見付け、「多面的・多角的な見方・考え方を働かせて問題解決に参画する子」の育成を目指す。

(2) 目指す子ども像

目指す子ども像を以下のように設定した。

自ら課題を見つけ、個別追究を根拠に対話する中で、多面的・多角的な見方・考え方を働かせて、問題解決に参画する子

(3) 研究の仮説

目指す子ども像に迫るため、以下の仮説を設定した。

仮説1	子どもたちの実態に合わせて、学校区の「材」を活用した単元を設定すれば、子どもたちは問題意識をもち、自ら課題を見付けて主体的に追究するだろう。
仮説2	個別追究したことに教師がレスポンスを返し、次のアプローチの視点を助言することで、多面的・多角的な見方や考え方の素地が築けるだろう。

仮説3	個人が追究してきたことをもち寄って、協働的な学びで深める探究的な学習を繰り返せば、新たな見方・考え方を働かせて問題解決に参画する力を養えるだろう。
-----	---

(4) 研究の手立て

研究の仮説を立証するための手立てを次のように考えた。

I【仮説1】についての手立て

手立て1 学校区の問題を題材として設定し、追究活動とつなげる単元を構想する

学校区に住む中で得た実感や実体験を基に、地域の魅力や価値、課題を浮き彫りにし、現地調査や地域住民への聞き取り調査を通して根拠をつくり、自ら問題について追究できる単元を構想した。そのような学習過程を設定することで、問題意識が連続し、思考が途切れることなく、主体的に学習に取り組めると考えた。

II【仮説2】についての手立て

手立て2 設定した問題へのアプローチの仕方を教師が支援する

個人追究の時間を保障したり、子どもたちが「総合ノート」や「学習日記」等にまとめた追究内容に教師が助言したりすることで、新たな問いを見出したり、今までとは違う個別追究の仕方を獲得したりすることができ、意欲をもってより深い個別追究に打ちこめると考えた。

III【仮説3】についての手立て

手立て3 学んだことや追究したことをさらに深める場の設定

個別追究したことをもち寄り、根拠を明確にしなが問題について学級全員で考える協働学習の場を設定することで、新たな視点での問題解決の糸口を見出したり、次のアプローチの仕方を学び合いの中で獲得したりすることができると考えた。また、今までの学びを表現できる場を設定することで、単元の最後まで意欲をもち続けながら学習に向かえと考えた。

(5) 抽出児について

仮説の検証のために2名の児童を抽出児として、変容を追っていく。

	児童の実態	教師の願い
A児 手立て 1・3	・6年生男児。真面目に追究学習を進めることができる。 ・自分自身の意見をもっているが、自信がもてず、人前で表出することが苦手。 ・学習と生活経験の結びつきが弱く、生活と絡めた意見がもちにくい。	・自身の考えをつくるための追究学習を進め、自分自身の考えに自信をもち、人前で表出させたい。 ・自身の生活経験を学習と関連させ、学習意欲をより高めたい。
B児 手立て 2	・6年生女児。 ・人前で話すことに抵抗感は少ないが、意見がまとまっていなくて途中経過なども表出できない。 ・自身の追究がこれでよいのか分からず、途中で行き詰ることがある。	・個別追究学習を自分自身で進め、論理的な考えや一貫した姿勢のもとで学習を進めてほしい。 ・個別追究学習の進め方を体得し、その方法を学級全体に広げられる存在になってほしい。

2 研究の実践と考察

1 学校区の住みやすさを考える

(手立て1 学校区の問題を題材として設定し、追究活動とつなげる単元を構想する の検証)

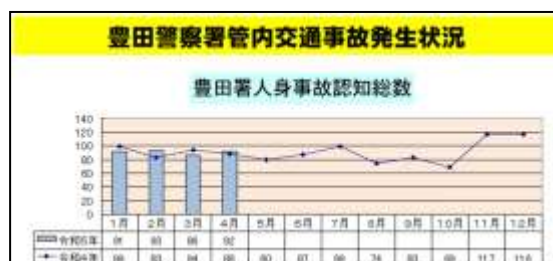
本学校区は歴史・文化芸術と緑の調和をテーマに整備された地区と、かつて城下町として建物の建造に制限をかけてまちの保存に努めていた地区もある。このような特徴のあるまちを材として単元を構想した。この材を以下のように分析した。

「このまちをより暮らしやすくするにはどうすればいいか」というテーマを設定したときにどんな問題が出てきて、その問題にはどんな要素が絡んでいて、その解決策としてどんな方法が考えられるかを教師が分析し、観点別に整理した。(資料1) この材の分析を念頭に置き、個別追究と協働追究を繰り返すことにした。単元の初めは学校区という広い範



資料1 材の分析

囲を取り上げ、自身の生活経験や問題意識をもちやすくする。そして、個別追究と協働追究を繰り返す中で、学校区の中でも追究する中心となる場所や観点の焦点を絞る流れとした。A児は「この学校区は住みやすいのか」という問いに対し、自身が住む地区のことを挙げ、「博物館や美術館があって、住みやすいことが多いけれど、自分の家の前の国道で、歩道が狭いのに自転車が入り込んできて危ないから交通面については住みにくい」と自身の生活経験を反映しながら追究していく内容を決めることができた。また、個別追究を進めていく上で、自身が危ないと思った場所を地図に記録したり、警察署のウェブページに交通事故の発生件数のデータ(資料2)があることを突き止めたりして、数多くの視点や方法で個別追究を進めることができた。材を学校区にした成果だといえる。



資料2 A児が収集したデータ

しかし、A児が収集してきたデータは主観が強かったり、資料2のようにデータとしては古かったりするものがあり、信頼性の高いデータとは言えないものも多かった。

2 個別追究学習を教師が支援する

(手立て2 設定した問題へのアプローチの仕方を教師が支援する の検証)

従来の調べ学習では、子どもたちが書籍やインターネットで調べたことを意味も分からず書き写したり、発表の際にそのまま読み上げて終わることが多くあった。また、調べ学習を踏まえた話し合いでは、明確な根拠がない意見が交わされることがあり、結果的に内容が深まらない話し合いになってしまうこともあった。そこで、児童が調べたことに教師が朱書きをしたり、対話したりすることで、追究の指導事項(資料3)にある視点が獲得できるようにし、問題解決に迫れる学習を目指した。

B児は学校区の交通問題を挙げ、「学校区の事故」という視点で調査を始めた。以下教師と児童の総合ノート等でのやり取りを記載する。(資料4)

問題に対しての追究を支えるときに	
① 問題の内容、全体像	資料3 追究の指導事項
② 問題が発生する因果関係	
③ 問題の当事者はどうとらえているか	
④ 立場を変えた問題のとらえ	
⑤ 問題の深刻度、危険度、切迫度	
⑥ 問題を解決する方法やその課題	
⑦ それぞれの追究の比較や関連	
⑧ 追究方法、データ処理方法、データや資料の信頼度	
⑨ 地区の特徴	

学校で事故に気を付けてくださいとよく聞くけど本当に学校区には事故が多いのか調べる。

- ・学校区でどれだけ事故が起きているのか地域の人に聞く
- ・インターネットで事故の起きる原因を調べる

- ・事故の起きやすい原因 1位安全不確認 2位脇見運転 3位… 交通事故の件数は10年で半減している。
- ・人の要因 飲酒、居眠り、注意力の低下などによる脇見、判断ミス、操作ミス
- ・外的要因 死角、視界不良、路面凍結など

特に死角とはどういうところのことを言うのかな。①写真などを示して分かるようにするといいいね。(中略)
調べたことで特にこの学校区と関わりそうなものは何だろう。

死角とは、人から見えなくなってしまうところのことをいう。

特に狭い道では、運転者の安全不確認、速度超過、車両感覚の欠如などがあり、さらに危なくなる。(中略)

死角で見えない場所の対策として、カーブミラーを設置するとよいと思う。②警察署にも電話して事故のことを調べたい。

どんなところにミラーを設置するといいいだろう。事故とミラーは関係しているかな。(中略)

警察署にも電話して、情報を集めてからミラーが必要なのか考えるのもいいですね。

(警察署で本人が学校から電話。聞き取り調査を行い、メールで学校区の事故発生箇所を送ってもらう。)

③



資料4 教師と児童のやりとり(実線 児童B ・ 点線 赤字 教師)

資料4の下線部①のように、B児の追究に対して、教師が指導事項(資料3)を意識しながら朱書きや対話をする事で、下線部②のように、次の追究方法につながる記述が見られた。これは主体的にB児が追究に向かっていったことが分かる。総合ノートを紹介したやりとりだけでなく、B児が教師のところに来て、「学校区で事故が起きているところが固まっているけれど、なんでだろう」「ミラーを設置した方がいいと思うところがたくさんあるけれど、どうやってみんなに伝えるといいかな」などと話すことも多くなった。また、インターネットのみの追究だけではなく、警察署への電話での聞き取り調査や資料提供(資料4③)を受けられたことで、情報収集の手段の幅を広げることにもつながった。以上のことから、個別追究を教師が支援することで、より根拠のある情報収集ができ、問題解決への足がかりができたと考えられる。

3 個別追究したものをもち寄り、協働学習で問題解決に向かう

(手立て3 学んだことや追究したことをさらに深める場の設定 の検証)

単元の中で個別追究したものをもち寄り、追究の仕方を共有したり、問題解決に向けての話し合いをしたりする協働学習の場を設定した。手立て1で記した通り、A児が収集してきたデータは信頼性の高いものとは言えないものもあった。

協働学習の最初にねらいとなる「調査方法の見直し」「今の様子をたしかめる」「内容を深める」の3つを確かめて、今まで調査してきたことをプレゼンテーションした。第1回意見交換会では、資料5

第1回意見交換会 第7次豊田市防犯活動行動計画をもとにプレゼンテーションした子に対して

C児 このデータは2021年のデータで最新のデータではないので、新しい資料にしたほうがいいと思います。プレゼン児 新しい資料が見付からなくて…

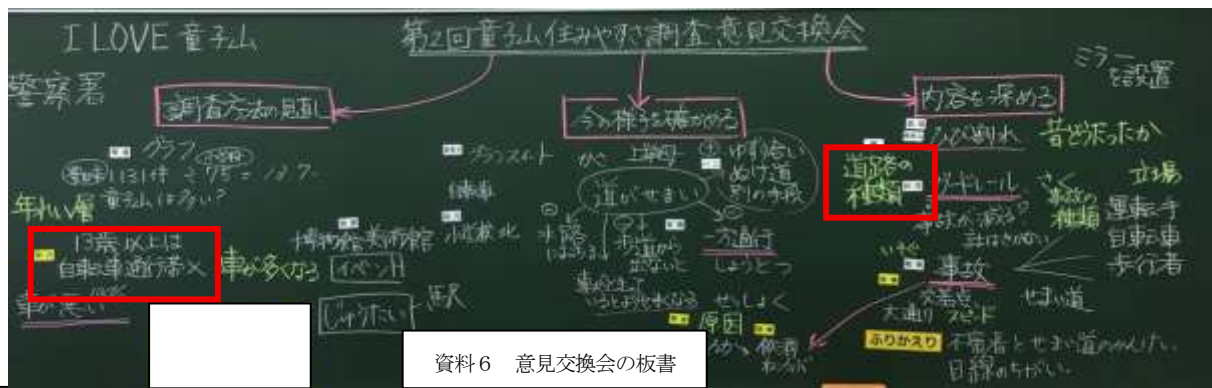
B児 私、これと違う新しいデータ見たことあると思う。新しい方が信頼できるし。

D児 第7次ではなくて第8次があるって調べて出てきました。

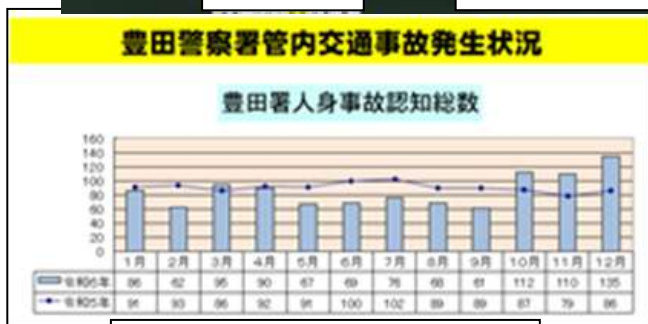
資料5 授業記録

の下線のようにB児が、収集したデータの中により新しい資料があることを伝えたこととなるべく最新のデータの方が信頼性が高いことが共有できた。

次の意見交換会でプレゼンテーションをする予定だったA児が授業後に教師のところまで来て、準備していた資料を変えてもいいか尋ねに来た。その後の第2回意見交換会では、A児のプレゼンテーションのデータ（資料2）が最新のデータ（資料7）に差し替わっていた。協働追究で出た視点が個別追究に生かされたことが分かる。また、自転車通行帯について調べていた児童が、A児が注目していた道路の自転車の通行数についてのデータをもって、道路の狭さだけに注目するのではなく、自転車通行帯を使用する人の視点からも調査するとより多様なデータが引き出せるのではないかと助言があった。板書（資料6）からも分かる通り、それ以外にも多くの追究の観点が出され、学級の追究への視点が深くなった。



資料6 意見交換会の板書



資料7 A児が新たに収集したデータ

- ① もう一度童子山学区の道が狭いところについて調べて、道が狭いところがどれだけあるのかを調べたい(アプリなどを使う)
- ② 家族や交流館にいる学区に住んでいる人に狭くて危ない場所はないかを聞いて地図にまとめて書きこむ
- ③ 事故が起きないようにするためには何をしたらいいのか(カーブミラー、自転車通行帯など)を考えていく
- ④ 本学校区に住んでいない他の学校区に住んでいる人に、その学校区は道の狭い場所があるのか聞いて童子山学区は他の学区と比べて道が狭いのかを調べたい

資料8 A児の今後の見通し

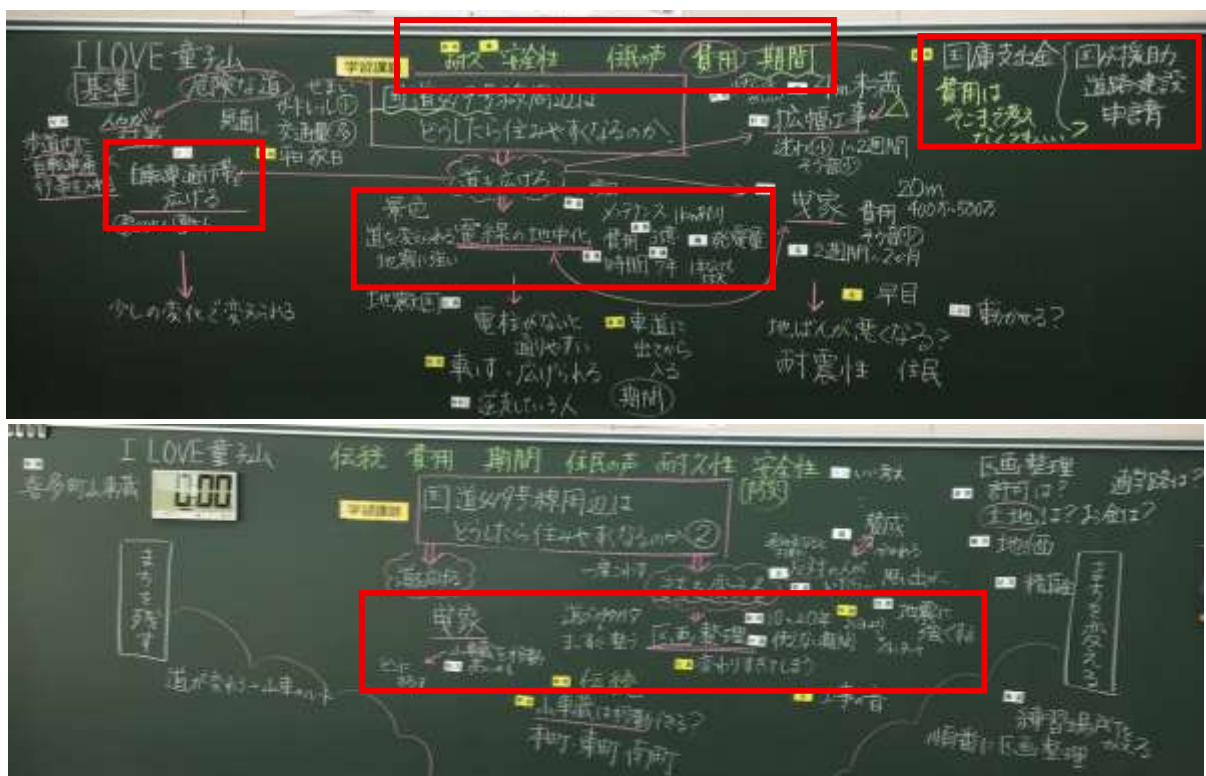
資料8の今後の見通しは、A児が第2回意見交換会後に書いたものである。次に取り組みたいことを4点挙げており、個別追究と協働追究を繰り返したことで学びをさらに深くしたことが分かる。

3 研究の成果

個別追究と協働追究を繰り返すことで、児童の問題意識は高まり、より深い問題にたどり着いていく。問題に対するアプローチの仕方が分かり、追究内容が深まってきたタイミングで「この学校区の中で一番困るのはどこだろう」と児童に問うと国道419号線沿いが自動車や自転車の交通量が多い割に道幅が狭いという意見が多く出た。この国道419号線の問題を解決するために個別追究をしたことをもち寄り、協働追究を行った。ただ上辺だけの解決法ではなく、実現可能かどうか、このまちに住む人にとって必要かどうかなどの切実感をもたせて追究活動を進めた。（資料9）

無電柱化	自転車通行帯	国庫支出金	曳家
電柱が歩道の中にあり、道幅を広げることが困難である。無電柱化を実施すれば、道幅も広げられ、景観もよくなるので、よいことばかり。	自転車通行帯を確保することで、自動車が通行しやすくなり、渋滞等の問題も緩和できるのではないかと。歩道に自転車道を作っている場所もあるので参考にできないか。	国道に関係するものなら国庫支出金というものがあるから、そこまで費用の面を気にする必要はない。そのため、積極的に工事をして、住みやすいまちにすべき。	喜多町の山車蔵の例もあるように、建物はそのまま場所だけを移動させる方法がある。この方法を使えば、道幅を広げ、安全なまちをつくることができるのではないかと。

資料9 問題解決に向けた個人追究



資料 10 問題解決に向けた協働探究の板書

資料 10 の板書からも児童が収集した情報が「無電柱化」「自転車通行帯」「国庫支出金」「曳家」などの意見に表れ、その方法をみんなで検討したり、起こりうる問題を考えたりしながら、その方法がこのまちの住みやすさにどうつながるのかまで話せていることが分かる。

国道 419 号線の問題に対して児童が考えたことを基に、豊田市議会でも市議会議員との意見交換会を行った。どの子も確かな知識と情報量をもち合わせていたので、堂々と意見を伝え、考えをより確固たるものにするきっかけになった。



資料 11
豊田市議会での意見
交換会

4 研究のまとめ

本研究を通して、地域に材を見だし、学習を展開することで、生活経験から物事を考える力が発揮できることや、ただ調べる調べ学習から、児童が自身で問題意識をもち学びを連続させて深めていく個別探究と協働探究の繰り返しへの転換によって多面的・多角的な考えを働かせることが可能になることが分かった。また、教師が強引に学びを引っ張り、主導していくのではなく、確かな教材研究を土台にして学びを導くことで児童の学びを深められることが分かった。

課題としては、教材研究や個別探究のレスポンスにかかる時間がどうしても増えてしまうことにある。小学校の課程の中で、系統的に探究の仕方を学んでいけば、この時間も短くできるはずだ。子どもたちが予測困難な時代に立ち向かうための力を付けられるように、今後も研究していきたい。